

# 「高校演劇らしさ」とテーマの流動性

— 「アルプススタンドのはしの方」を中心に考察する —

文学部文学科演劇学専攻

中田 な かつ  
夢花 ゆ め かつ

## はじめに

私は高校時代に演劇部に所属しており、入部してすぐに経験したのが二〇一七年に開催された第六三回全国高等学校演劇大会宮城大会であった。(本稿では次から、全国高等学校演劇大会のことを、便宜的に広く認知されている通称「全国大会」と書く。)そこで生で兵庫県立東播磨高校演劇部上演の「アルプススタンドのはしの方」を観劇し、その面白さに感銘を受け、自分が高校演劇や戯曲執筆に打ち込んで行く原点となった。また高校演劇での創作活動によって、極度のあがり癖や人の目を見て話せないといった自身の癖を認識し、演者としての稽古や顧問の教諭や部活仲間とのコミュニケーションを通じて、三年間でその弱みを克服してきた。言葉通り高校演劇によって、自分自身の人生が大きく変わった。

前述の「アルプススタンドのはしの方」という作品は二〇一七年度開催の全国大会で最優秀賞を受賞し、二〇一九年度には高校演劇舞台化プロジェクトと題して商業演劇として上演され、映画化、漫画化と幅広く展開された。「高校演劇」といえば、越智優、曾我部マコト、畑澤聖悟……そういった名前が挙がる中で、新たに高校演劇を牽引していく代表的な作品となったと言えるだろう。

今回はその「アルプススタンドのはしの方」という作品を読み解いていく。そして、高校演劇における「高校演劇らしさ」、そして高校演劇の持つ可能性について考察する。

なお本稿では、藪博晶作「アルプススタンドのはしの方」の本文は、全て以下に拠った。藪博晶「アルプススタンドのはしの方」(『季刊高校演劇』NO241、2017、宮城大会上演作品特集、高校演

劇創作研究会、二〇一七年七月)

## 第一章 高校演劇の概要

### ・高校演劇の定義

まず「高校演劇」について簡単に整理したい。高校演劇とは、高校生の部活動の一環で行われる演劇活動を指す。主に演劇部、演劇同好会と呼ばれるものである。演劇部の公演機会は、自主公演のほか学校の文化祭や地域の演劇祭などがある。そして、毎年夏に全国大会が開催されており、上位大会を目指す演劇部は地区大会(ある地域とない地域がある)、都道府県大会、ブロック大会の順に駒を進めていく。高校演劇の大会において審査員を務めている工藤千夏の著書では、高校演劇は次のように説明されている。

- 高校演劇とは、①学校教育の場でおこなわれる部活動である②全国大会を頂点とするコンクールがある③コンクール以外の発表機会は、春フェス、学校祭、自主公演など④高校演劇の活動スケジュールは、学校の暦(年度)に準拠⑤コンクール台本(六十分)は、創作脚本と既成台本に大別(工藤千夏『コロナ禍三年高校演劇』論創社、二〇二三年八月、一〇頁〜一一頁)

引用内の春フェスとは各ブロック大会の第二席の高校が出場する春季高等学校演劇研究大会を指している。

全国大会で上位四校に入賞した演劇部は国立劇場での上演機会が

与えられる。そして、最優秀賞を受賞した作品は国立劇場公演に加えて、毎年九月頃にNHK制作の特別番組「青春舞台」で全編放送される。演劇はスポーツのように明確な順位や優劣がつけられるものではない。だが、それでも高校演劇において大会が重視される傾向があるのも、全国大会という場の世間的な注目度の高さに加え、勝ち進むごとに多くの人に作品を届けることが出来るという点が理由の一つであると推測される。

今回扱う「アルプススタンドのはしの方」は兵庫県立東播磨高校演劇部が二〇一七年度の全国大会で最優秀賞を受賞した作品であり、大会に向けて同校演劇部顧問を務めた教師が書き下ろした六十分の創作脚本である。

#### ・高校演劇の脚本について

高校演劇はあくまでも学校教育の中での活動という点、劇団や商業演劇などの他の演劇ジャンルとは大きく違う点である。部活動という時間的な制約、また全国高等学校演劇協議会規約に記載されている大会の場における演技時間六十分以内・装置設置撤去三十分以内といった厳格なルール、そして昨今のコロナ禍での県ごとに異なる感染対策の指標など、教育現場ゆえの制約の多さも特徴的だと言えらるだろう。

また、高校演劇の中でも大会に注目すると、その創作脚本率の高さも特徴的だと言える。実際、「アルプススタンドのはしの方」が最優秀賞を獲得した二〇一七年度の全国大会では一二作品中一一作品が顧問もしくは生徒による創作脚本であった。そして、ここ十年間の全国大会最優秀賞受賞作品が全て創作脚本であることも触れて

おきたい。これらことから、高校演劇の大会における創作脚本の完成度の高さ、またある意味創作脚本に優位性があることが推測できるだろう。劇作家である瀬戸山美咲は、二〇一八年度の全国最優秀作品「フットボールの時間」の商業演劇版で演出と潤色を務め、その公演フライヤーの中で以下のように記している。

高校演劇は、短時間の仕込みや大ホールでのマイクなしの上演、六十分の時間制限など、プロよりもはるかに過酷な条件のもと上演されます。制約の中で表現を追求するからか、オリジナル戯曲の質がとて高い印象があります。(a l a C o l l e c t i o n シリーズ「フットボールの時間」二〇二三年一月吉祥寺シアター公演フライヤー)

では、具体的に高校演劇の創作脚本はどのような点が優れているのだろうか。

まず、一般の商業舞台とは違い、学校や部活動というコミュニティの密度の高さが挙げられる。それ故に顧問の教諭と生徒、そして生徒同士のそれぞれが互いの人間性や性格をある程度理解していることから、創作脚本では意図しておらずとも、あてがきのように書かれることも少なくない。あてがきの具体例として、北海道滝川高校定時制演劇部の「鉄輪」や岐阜県立加納高校演劇部の「彼の子、朝を知る」などが挙げられる。筆者自身が高校時代に執筆し、二〇二〇年の全国大会に出場予定だった徳島市立高校演劇部「水深ゼロメートルから」も全編あてがきである。そして「全校ワックス」をはじめ、顧問時代に数多くの高校演劇の名作を手掛けてきた

中村勉も自身のnoteで「脚本は単独で成立するものでなく、ましてじぶんはすべて当て書きなので、部員と脚本は切り離せません。」(中村勉note「放課後の旅・高校演劇の脚本について」<https://note.com/suchanga> 閲覧日二〇二三年一月二日)と語っている。また、高校演劇においては、例えば作品内で先輩と後輩が出てくるとしたら、先輩は二年生が、後輩は一年生が演じることが多い印象を受ける。初演時の「アルプススタンドのはしの方」では、登場人物については第二章で触れるが、会話の多い安田、田宮、藤野の役を三年生が、一匹狼の宮下役を二年生が演じている。以上のように、高校演劇の創作脚本においては役者ありきの脚本になっていることが多いため、創作脚本ではより高校生が演じるキャラクターが魅力的に見える。

そして、大きな震災があった年は震災について取り扱った作品が、昨今のコロナ禍ではコロナによる苦悩や葛藤をテーマにした作品が多く、高校演劇の創作脚本(特に大会作品)においてはその時代の特色が色濃く反映されている。東日本大震災翌年の二〇一二年度の全国最優秀作品は震災復興をテーマにした青森中央高校上演「もしイタ〜もし高校野球の女性マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら」であったし、コロナ禍を経て二年ぶりに通常開催された二〇二二年度の全国最優秀作品はコロナ禍の演劇部の苦悩をテーマにした松山東高校上演「今日は塾に行くふりをして」であった。そして、ロシアとウクライナの戦争など国際的に大きな出来事に直面している本年度二〇二三年の全国最優秀作品は戦争をテーマにした徳島県立城東高校上演の「21人いる!」であった。ちなみに例に挙げた三作品はすべて各演劇部顧問を務めた教諭とコーチが執筆し

た顧問創作作品である。また、大会作品からは逸れるが、二〇一三年福島県のいわき総合高校総合学科芸術・表現系列(演劇)第十期生アトリエ公演にて、飴屋法水が脚本演出を務めた「ブルーシート」は第五八回岸田國士戯曲賞を受賞した。この作品も東日本大震災から二年経過した二〇一三年、震災を経験したいわきの高校生を描いた作品である。これらのことから、高校演劇における作品のテーマは非常に流動的であり、社会問題を扱った劇が多いことがわかる。高校演劇はその時代をうつす鏡のようになっていとも見える。

#### ・創作脚本が高校生に与える影響

前述の上演記録から推測するに、高校演劇は表現活動の場としてだけではなく、教育的な活動の場として、高校生が演劇を通して社会問題や自身を取り巻く環境、そこから発生する思春期ならではの葛藤や悩みについて、議論、検討する装置としても機能しているとも言えるのではないだろうか。またこの仮定が正しければ、高校演劇が高校生にもたらす効果はドラマセラピー的な要素も含んでいると言えるのではないだろうか。ドラマセラピーとは、「物語を演じることで自分の心の問題に向き合い、心の安定を保つ療法」(ジャパンナレッジ「ドラマセラピー」[https://japanknowledge.com/psnl/display/?id=5002019\\_160146200](https://japanknowledge.com/psnl/display/?id=5002019_160146200) 閲覧日二〇二四年一月九日)のことを指す。また類似したものでアメリカの精神科医モレノが提唱したサイコドラマが挙げられる。サイコドラマとは、「患者は劇の主役となり、補助自我の助けを借りて自らの問題・葛藤を即興劇として演じる」(ジャパンナレッジ「サイコドラマ」<https://>

japanknowledge.com/psnl/display/?lid=1001000094002 閲覧日二〇二四年一月九日) ことである。ドラマセラピーとサイコドラマの違いについては、C I I S と立命館大学大学院応用人間科学研究科で交わされた学生交換協定締結を記念する特別講演会(二〇〇六年七月二九日開催) 記録「ドラマからドラマセラピーへの新たな展開―自己表現とアイデンティティの広がり―」(講演者ルネ・エムナー、訳中野左知子)にて、サイコドラマが個人を重視するのに対してドラマセラピーは集団を重視することが指摘されている。以上のことを踏まえて、教育活動における集団の一つである部活動(高校演劇)によって得られる効果は、サイコドラマよりもドラマセラピー的だと言えるだろう。ドラマセラピーに関して、立命館大学教授の尾上明代は日本演劇学会分科会演劇と教育研究会研究資料にて小学校でのドラマセラピー的な劇授業の効果に触れた上で、「日常生活に『似た』状況で即興場面練習などを行うドラマセラピー的なアプローチには、脚本劇でキャストイングをして行う一般的な劇活動では出にくい効果がある」(日本演劇学会分科会演劇と教育研究会研究資料 尾上明代「学校教育におけるドラマセラピーの効用」<https://ekknmo.jp/archives/event/20000731ono> 閲覧日二〇二三年一月二〇日)と記している。

これを高校演劇に当てはめて考えた場合、確かに既成戯曲での上演ではドラマセラピー的な効果は薄いかもしくない。現在、北海道文教大学教授で自身も高校演劇の顧問を務めていた加藤裕明の「演劇教育による協働的創造性育成過程の質的研究・演劇部活動における高校生の変化」でも「観客も含め、舞台上に創造されたものを通じて実際の生活を学び直す、という経験」は、「単なる一般的な上

演活動、つまり、あらかじめ定められた脚本をそのまま上演するような活動では得られにくい。」(加藤裕明「演劇教育による協働的創造性育成過程の質的研究・演劇部活動における高校生の変化」、北海道大学博士(教育学) 甲第一二二八四号、二〇一六年三月([https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/62207/1/Hiroaki\\_Kato.pdf](https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/62207/1/Hiroaki_Kato.pdf) 閲覧日二〇二四年一月九日)と語られている。だが、高校演劇の創作戯曲においてはどうか。加藤は「演劇教育による協働的創造性の獲得―部活動による高校生の演劇創造過程に着目して―」(『教育学の研究と実践』九号、北海道教育学会、二〇一四年四月、([https://www.jstage.jst.go.jp/article/tpe/9/0/9\\_1/pdf-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/tpe/9/0/9_1/pdf-char/ja) 閲覧日二〇二四年一月九日)で、自身が演劇部の顧問を務めていた時代の演劇部における創作戯曲の生成と上演に至るまでの過程を記している。この中で加藤は、上演の過程で生徒が育んだ創造性のほかに、他者への自己表現が苦手な生徒が創作を通じて自身の弱みを認識し、自発的に働きかけていく必要性を持ったことを記している。また二〇一七年九月九日放送NHK制作「青春舞台2017」では、出場校のひとつである明誠学院高等学校に密着し、学校を休みがちだった内気な男子生徒が演劇部での活動を通して自分自身と向き合い、仲間たちと全国大会の本番を迎えるまでの様子を放送している。

以上のことから、高校演劇の創作脚本はあてがきやテーマ性による作品の強度に加えて、高校生がひとつの話題に対して議論または検討する場として、また以上のような「ドラマセラピー」に類するものの側面として高校生が自分自身に向き合う場としても機能していると言える。

## ・「高校演劇らしさ」について

ここまでは高校演劇の創作脚本について書いてきたが、ここからは「高校演劇らしさ」について考えていく。高校演劇において、講評や観客の感想などで度々目にするところがあるのが「高校生らしい」「高校演劇らしい」という言葉だ。実際「アルプススタンドのはしの方」が最優秀賞を受賞した二〇一七年度の全国大会の講評内で審査員が「高校生らしい」と発言し、Twitter（現X）を中心に賛否両論を呼んだ。

このことに関しては、二〇一七年度の大会で審査員を務めた演出家の佐川大輔が自身のブログにて、次のように述べている。

僕は、その中から「最もクオリティが高く、多くの人に伝わる強度のある演劇を選ぶ。」というスタンスで審査をしました。もちろん演劇である以上、受け取り手の趣味嗜好やイデオロギーは影響するだろうが、そういう要素は極力排して選んだつもりだし、「高校演劇らしい」ということは評価基準にしたつもりはありません。（「高校生が演じている」ということが生み出す長短所は認識していたけれど。）（佐川大輔公式ブログ「シアターモーメント」<http://moments.jp/2017/08/10/daily/> 閲覧日二〇二三年一〇月一〇日）

一方で、「アルプススタンドのはしの方」の作者の藪博晶は商業版「アルプススタンドのはしの方」の二〇一九年浅草九劇の上演時のパンフレットにこう記している。

高校演劇の魅力は「未熟さ」だと思えます。高校生は当然役者として未熟ですし、人としてもまだ未完成です。それゆえ起こる葛藤や疑問や感動を、未熟だけれども嘘のない演技で見せてくれる。それが高校演劇の面白さです。（「アルプススタンドのはしの方」二〇一九年六月浅草九劇上演時パンフレット、SPOTTED PRODUCTIONS 発行、二〇一九年）

佐川の言葉を借りるのであれば、（彼の考えとは相反するかもしれないが）高校生が演じていることの生み出す長所短所＝所謂「高校生らしさ」なのではないかと考える。この長所短所こそが藪が語った「未熟さとそれから産まれる嘘のない演技」、つまり完成されていない肉体や粗のある未完成感が、「高校生らしい」と感じる所以の一つなのであろう。また、「アルプススタンドのはしの方」は商業舞台版と映画版ともに、若手の俳優を起用している。高校生に比較的年齢の近い、かつ演技経験が少ないキャストも起用していることで、商業化で高校演劇という枠組みからは逸れるもの、あくまで原作の良さを大事に、高校演劇らしさを表現しようとしたことがわかる。

周東美材の『未熟さの系譜』（新潮社、二〇二二年五月）ではジャーニーズ、宝塚歌劇団、甲子園など日本の幅広いジャンルでの日本人の「未熟さ」への愛好を指摘した上で、一九七〇年代までの音楽に着目し、未熟さの反復性を語っている。前に引用した商業版「アルプススタンドのはしの方」のパンフレットで藪も語っているように高校演劇も技術的な、あるいは精神的な「未熟さ」を大きく

含んでいる。よってプロの劇団のように毎回の芝居が安定しているわけではない。二〇一六年の全国大会で徳島県立阿波高校演劇部が上演した『2016』の脚本のように、大会で勝ち進むごとに脚本や演出の試行錯誤が重ねられることも多く、同じ演目でも公演ごとに大きく出来や印象が異なるケースなども散見される。ひとつの公演の成長を見守るという点ではジャニーズや宝塚の応援文化と通ずるところがある。高校演劇ファンがプロの作品ではなく高校演劇に惹かれる背景は、日本人がお茶の間で未熟さを愛好し、消費してきた背景とも繋がっている。

以上のことから高校演劇の大会においては、生徒もしくは顧問による創作脚本、中でも教育現場という便宜上、高校生の不熟な身体で演じられる等身大の作家的な社会問題を扱った劇が評価されている傾向があると捉えられる。

では、「アルプススタンドのはしの方」はどのようなだろうか。次の章からは、脚本分析から本作の持つテーマ、扱っている社会問題的な要素について論じていく。

## 第二章 「アルプススタンドのはしの方」について

### ・作品概要

「アルプススタンドのはしの方」は東播磨高校演劇部上演、当時顧問であった藪博晶が執筆した作品だ。二〇一七年度の全国高等学校演劇大会にて最優秀賞を受賞した。その後、二〇一九年には劇団献身の奥村徹也演出により浅草九劇にて上演。その後、再演を経

て、二〇二〇年にSPOTTED PRODUCTIONS制作、城定秀夫監督により映画化されている。映画は好評を博し、第四二回ヨコハマ映画祭で監督賞、第一二回TAMACINEMA FORUMで特別賞を受賞した。

本作品の舞台はそのタイトルにもあるように野球場のアルプススタンドだ。野球部の県大会一回戦、甲子園球場のアルプススタンドを舞台に、全員強制参加の野球部の応援に訪れた野球のルールを知らない演劇部員の安田と田宮、元野球部の藤野、優等生の宮下四人が織りなす一幕物の会話劇である。

### ・脚本の巧みさ 登場人物の共感性について

ここからは脚本の内容に入っていく。「アルプススタンドのはしの方」に登場する四人が抱えているのは虚しさである。マウンドに立つことは出来ず、アルプススタンドで熱心に歓声を送るわけでもなく、ただはしの方でひっそりと試合を見る何者にもなれなかった者たち。思春期特有の退屈さや焦燥感、空虚感を代弁してくれる人物構造になっている。安田は演劇を諦めた人、藤野は野球を諦めた人、田宮は安田に複雑な気持ちを抱きやきもきしている、宮下は初めてテストで他の人に負けた。野球部が青春の象徴であるならば、アルプススタンドの彼らは青春を味わい尽くしていない人たちであろうか。アルプススタンドからマウンドを見ながら、ぼつりと吐き出した安田の台詞として、以下のものがある。

安田 ……高校三年生の夏ってこんなかなー？

藤野 ……どんななん？

安田 なんか、もつとなんか、青春みたいなさ。

藤野 青春な……青春って何？

安田 ……なんやろ……まあ、甲子園は青春なんちゃうん？

藤野 ああ、なるほど。

安田 私ようわからんけど。

(「アルプススタンドのはしの方」一九九頁)

これらの会話から、安田と藤野が青春にコンプレックスを抱いているのが読み取れる。

だが、この作品が最後に導くのは、「アルプススタンドも青春だ」という結論だ。はしの方にも、青春がある。逆を言えば、マウンドの野球部にも抱える悩みや葛藤がある。日常会話の中で、等身大の高校生が抱える想いをコミカルに、時には真剣に描く鮮やかさは、高校生活のコミュニケーションにおいて挫折を味わったことがある人には、必ず誰かに共感できる構造になっている。

また作者の藪は『舞台上の青春 高校演劇の世界』（相田冬二、辰巳出版、二〇二〇年一月）の「巻末特別インタビュー『アルプススタンドのはしの方』」にて四人の登場人物それぞれに学生時代の自分を投影させたと語っている。安田と田宮には藪自身の高校時代や大学時代における演劇公演の中止の経験、藤野には中学でサッカーをやめた経験、宮下にはサッカーをやめた代わりに勉強に打ち込んだ経験が投影されている。作者自身の学生当時のある種のコンプレックスや思い出が、アルプススタンドの彼らのリアリティに繋がっているのだ。そしてそれらを、現役の高校生が其々のコミュニケーションに持ち帰り、自身に置き換え咀嚼し、台詞を通して自分自身の

思いを代弁することで、実感が増してゆく。高校生の身体で演じる完璧ではない未熟さが、より登場人物たちの心の未熟さを補強している。学生時代ならではの等身大の渴きともがきが、高校生は勿論のこと、大人にも高校時代を思い出させ、幅広い年代から共感を生みやすくなっている。これらのことから、藪の実体験、その中でも等身大で普遍的な悩みを扱うことによって、作者と演じる高校生にとって、自身の思いを発散させるための場として機能しているのがわかる。

#### ・劇中世界の広がり アルプススタンドの向こう側まで描く

本作品の最大の特徴として、会話の進行と共に野球の試合も進行して行くことが挙げられる。登場人物たちの会話に野球の試合の進行という要素が加わることで、上演時間六十分という時間の制約の中でもあくまで自然に、登場人物たちの心情の変化が描かれている。そして、野球の表現としては目線をうまく活用している。四人が視線を合わせ、ボールを追うことで、次第に舞台上にあるはずのないボールや野球部の動きが浮かび上がってくる。アルプススタンドとグラウンド、観客からは見えない向こう側をも描くことで、劇世界の広がりやアルプススタンドという場所の必然性を強めている。

また、本作では台詞のみで描かれる人物が複数人存在する。同校のエース園田、吹奏楽部で園田の彼女である久住、下手くそだが誰よりも野球の練習をしていた控への矢野、そして相手チームの絶対的番松永。アルプススタンドの四人の日常会話の中で、舞台上には存在しない彼らの人物像や性格が語られ、観客の想像を掻き立てる。



以下、台詞のみで語られる人物に着目して、作品中から具体的な台詞を挙げる。

まずは野球部のエースである園田についてである。園田については二つのシーンをピックアップした。次の会話は、安田と田宮がアルプススタンドを去り、宮下が一人になった藤野に園田について尋ねる場面である。

宮下 園田君って野球以外で何が好きなん？

藤野 ……え？

宮下 ……。

藤野 え、今の俺に言った？

宮下 うん。

藤野 あー……何で俺に聞くん？

宮下 だって、野球部やったんやろ？

藤野 そうやけどさ……直接聞けば良いやん。

宮下 え、でも。

藤野 まあそれさ、よく聞かれるけど……ないと思うで。

宮下 ……ないん？野球以外に好きなもの？

藤野 野球のことしか考えてないんちゃうかな……多分。

宮下 そうなんや。

（「アルプススタンドのはしの方」二〇五頁）

この会話から園田が野球一筋のストイックな存在であることと、宮下が園田に恋心を抱いているであろうことが読み取れる。また、藤野と宮下の微妙な関係性も読み取れる。

次に八回裏、ピンチの場面で園田が松永と対決しているシーンである。

八回裏、守備

（前略）

宮下 ……でもさ、園田君はもつと怖いよね、きつと。

田宮 え……ああ、そっか……そんなこと、想像したこともなかった……ああ、ボールか。

宮下 これだけの観衆の中でさ、カメラにも映ってさ、怪物みたいなやつを相手にしてるわけやろ。怖いに決まってるよな。

田宮 そっか……そうやんな……私らと同じ高校三年生やもん

な……何か、こっから見てると全然別世界の人みたいに見えるけど、そんなことないもんな。

（中略）

藤野 おーい！お前、何のために野球やってんねーん！何のために野球やってんねーん！何のために野球やってんねーん！

田宮・宮下 ……。

藤野 どんな気持ちで立ってるかって、負けたくないって思ってるに決まってるやろ。そういうやつや。園田は。

間。

歓声（ストライク）。

藤野 よっしゃー！

田宮・宮下 やったー！

〔「アルプススタンドのはしの方」二二四頁～二二五頁〕

以上の会話から、園田の逆境を乗り越えるメンタルの強さと野球への想いが説明されている。また、野球と園田のことをよく知る藤野と、そうではない田宮と宮下の園田に対する感じ方の違いもうまく表されている。

続いて、野球部の控えである矢野について触れていく。次の会話は、藤野が野球のルールを知らない安田と田宮に野球について教える中で、矢野について説明するシーンである。

藤野 矢野って分かる？

田宮 矢野君？野球部の？

藤野 うん。あいつさ、今もベンチに座ってると思うねんけど、試合に出ることなんかないねん。

田宮 何で？

藤野 へたやから。

安田 はつきり言ったな。

藤野 いやほんま、全然、センスがないねん。めっちゃ練習すんねんけど、でも全然うまくならへんねん。才能がないねん。

安田 めっちゃデイスられるやん矢野君。

藤野 やのにめっちゃ練習すんねん。やから何か、それ見ると腹立ってくんねんけど。

〔「アルプススタンドのはしの方」二〇三頁〕

以上の台詞から、矢野は野球が下手であるのに誰よりも練習をしている人物であること、野球部を辞めた藤野はそんな矢野のことを快く思っていないことが説明されている。

最後に、吹奏楽部の久住についてである。安田と藤野が宮下について会話をするシーンで以下のような会話がある。

藤野 ……え？あの人？宮下さんって、あの宮下さん？

安田 知ってる？

藤野 あの宮下さんやろ？学年一位の。

安田 こないだ初めて二位とったけど。

藤野 あ、そうなん？

安田 智香に負けてん。

藤野 智香って？

安田 久住智香。知ってる？吹奏楽の部長の。（前の方を指さして）あそこ。トランペット持ってる。

（中略）

藤野 久住さんが一位やったん？

安田 そうそう。めっちゃ喜んでた。初めて宮下さんに勝ったって言うって。

藤野 へー。すごいな。部活も頑張ってるのに。宮下さんに勝つとか。

〔「アルプススタンドのはしの方」二〇一頁〕

これらの台詞から、久住が努力家であるということ、また宮下が学年で人目置かれている人物であることが読み取れる。

また、本作は前述の台詞だけではなく、音でも舞台上にはいない登場人物を表現している。その代表的なものが、野球の登板曲だ。「エル・クンバンチェロ」(ラフェエル・エルナンデス作曲)が流れると、園田がマウンドに立つ。戯曲には書かれていないが、原作の舞台では松永の番には毎回同じ曲が流れ、試合終盤のピンチの場面では、松永の登板曲にどきりとさせられる。

これらのように本作は、高校生の間日常会話や音響を通して舞台上には登場しない登場人物やアルプススタンドの向こう側のマウンド風景まで緻密に描かれている。見えないものを魅せる脚本と演出の巧みさが、本作ならではの魅力のひとつだと言えるだろう。

#### ・高校野球と高校演劇 マウンドとアルプススタンドの比較

高校演劇の大会作品となれば、自ずと観客層の多くを占めるのは現役の高校演劇部員だ。本作品では、「マウンドの野球部」と「アルプススタンドの四人」の比較の一方で、「高校野球」と「高校演劇」の比較が為されている。その具体例として、次のような台詞がある。安田と田宮と藤野が、園田のスカウトについて話をしている場面である。

安田 まあ演劇やったら絶対そんなないよな。

藤野 演劇？

安田 ああ、私ら演劇部やねん。

藤野 あ、そうなんや。

田宮 確かに演劇でプロからスカウトとかはないやろな。

安田 全国大会行ってもさ、全員で見に行こうとか絶対ならへ

んし。

藤野 あー……え、演劇の大会って何すんの？

安田 ……演劇。

(中略)

藤野 今年はこれから？

安田 いやー、今年はおえへん。

田宮 あ。

藤野 え、何で。受験やから？

安田 まあそれもあるし、近畿大会までは秋やねんけど、全国大会は来年の夏やねん。

藤野 え、何それ。

安田 何それやろ。

藤野 出られへんやん。

安田 そうやねん。

藤野 ……不思議な大会やな。

(「アルプススタンドのはしの方」一九七頁～一九八頁)

右の台詞から、高校演劇の不遇さや、作者の高校演劇における大会のシステムへの不満が読み取れる。

これらの「高校演劇」を自虐するような台詞は、実際に客席で見ている、高校演劇部員の気持ちを代弁しているとも捉えられるだろう。引用後半の安田の台詞は高校演劇においてよくある話であり、地方のプロック大会から全国大会の間に年度をまたぐ関係で、地方大会を勝ち抜いたものの全国大会の際には三年生が卒業してしまっていることが原因で、出場を辞退したりキャストを一新したりする

ケースも実際にある。世間の知名度から比較すれば、高校野球がマウンドに立って脚光を浴びる存在であるならば、高校演劇はアルプススタンドのはしっこにいる彼らなのかもしれない。これらのネガティブな台詞の数々が、高校演劇部員、高校演劇経験者の共感を誘っている。登場人物が演劇部員で、かつ「高校演劇あるある」話を繰り返すことで、主な観客層である高校演劇部員が作品に引き込まれやすくなっている。

### ・込められているメッセージ性

ここまでは物語と台詞に着目してきたが、ここからは本作に込められているテーマについて考察していく。

アルプススタンドにいる登場人物たちの前に立ちふさがる壁は「どうしようもない」ことばかりである。

安田は自身の脚本で近畿大会まで駒を進めたものの、田宮のインフルエンザ罹患で、直前で出場を断念してしまった。田宮はそれを引きずって、安田に気を遣ってしまう。しかし、感染症罹患は対策していても防ぎきれないこともある。安田は、「インフルになった田宮は悪くない。運が悪かっただけで、自分たちの力ではどうしようもなかった」と自分を納得させている。

藤野は野球部でピッチャーとして日々練習を重ねていたが、同校野球部には絶対的なエース・ピッチャーの園田がいる。園田の才能を目にして、自信との実力差を実感する。藤野は、才能には努力は追いつけない、園田がいる限り自分はどう頑張ってもマウンドに立てない、そう考えて野球を辞めた。誰が悪いわけでもない、仕方がなかったことだと自身に言い聞かせている。そして、誰よりも野球

が下手で試合に出られるわけがないのに、誰よりも練習を重ねる矢野のことが理解できずにいる。

入学以来テストですつと学年一位をキープしていた宮下は、この前初めて二位になった。一位の座を奪ったのは吹奏楽部の久住であった。沢山の人に囲まれて、明るくて、宮下が恋焦がれた園田の彼女である久住。自分とは正反対の久住に劣等感を抱きながらも、園田の応援を続ける。仕方がないとわかっていても諦めず、ひとりでもがき続けている。

安田と藤野は「どうしようもないこと」に諦めてしまった人たち、田宮は「どうしようもないこと」に罪悪感を抱き、自分の気持ちに素直になれない人で、宮下は「どうしようもないこと」を諦めない芯の強さを持つ人である。

「どうしようもないこと」にどう向き合うか、このテーマを軸に、四人それぞれがそれぞれのコミュニケーションの中で、どうしようもないことに打ちのめされている。本作品はどうしようもないことに燃っていた四人が、どうしようもないことに向き合うために、再び立ち上がるまでの物語であると考える。

作中で安田は劣勢の野球部の試合を横目に「勝てるはずない」とぼやき、宮下はそれに対して怒りを露わにする。次の台詞は、安田と宮下が「どうしようもないこと」について衝突するシーンである。

安田　なんか園田君もさ、さすがに疲れてきてる感じするよな。特にホームラン打たれたあと。

田宮　うん。頑張ってるのにな。結構打たれて。

安田　まあしょうがないよね。相手のほうが格上やし。

宮下 あのみ。

安田 ……え？私？

宮下 しようがないって言うんやめてくれへん？

安田 え？

宮下 しようがないって言うんやめて。

安田 ……なんで？

宮下 何か…聞いてて気分悪い。

安田 ……え別に、関係なくない。

宮下 頑張ってるやん園田君。なんでそんなふうにする。

安田 え、何？怒ってるん？

宮下 頑張ってるのにさ、周りで見てる人に勝手にしようがないとか言われたら、嫌やと思う。

安田 ……私は言われたけどな。

宮下 え？

安田 私はしようがないって言われたけどな。

田宮 あすは。

安田 めっちゃ頑張ってたつもりやった。でも、言われたよ。

しようがないって。……そんな経験ないやろうけどさ。

毎回一位とるような人は。

(「アルプススタンドのはしの方」二二二頁)

以上のやりとりから、安田と田宮の考え方の違い、また安田が演劇を諦めるに至った苦悩と結果を残している人間への劣等感とコンプレックスが説明されている。

安田の悔しさは宮下にはわからない、宮下の孤独は安田には理解

ができない。お互いが交わることはできない、それぞれを取り巻く世界の中で、それぞれがそれぞれの悩みを抱え、もがいている。どうしようもないから、彼らはアルプススタンドのはしっこにいる、そう読み取ることができる。

だが、マウンドにいる野球部も、どうしようもないことに立ち向かっている。努力を重ね宮下に勝った久住に、敵うわけがないどうしようもない怪物に立ち向かって勝った園田、そして最後の最後に試合出場のチャンスをつかんだ矢野。どうしようもないことを諦めなかった彼らの姿は、安田や藤野の心に火を灯しエールを与え、アルプススタンドのはしっこにいる四人も立ち上がる。安田と田宮は今年の大会に出場することを決め、宮下は久住に賛辞を送り、藤野は園田と矢野に全力で応援する。気付いたときには、観客もアルプススタンドのはしの方の彼らも青春の端の方ではなく、青春のど真ん中にいた。

そして試合は矢野の最後の打席で終わる。同校が負けて、涙を流す安田たちの姿は、野球部の試合を通して、彼らの心情が変化したことが描かれている。四人が試合を通して得たのは、諦めてきた日々への後悔と、新たな希望だ。「どうしようもないことをどうにかしようとすることは、決して無駄ではない」と全ての青春を肯定し、試合終了のサイレンさえも、彼らの新たな日々を出迎えているように感じる、希望を抱ける幕切れとなっている。

#### ・上演時の劇評

高校演劇の二〇一七年度開催の全国大会の劇評は全国高等学校演劇協議会が発行している『演劇創造』一三七号(全国高等学校演劇

協議会、二〇一七年一月」という冊子で読むことが出来る。以下、同号に掲載された「アルプススタンドのはしの方」の劇評の一部である。

まず、全体に共通して見られた好評的な意見としては、共感できるテーマ性と生きた台詞、また舞台外にも広がる劇中世界が挙げられる。演出家、劇作家の高泉淳子は「顧問が書いた作品ですが、部員を生かした台詞の書き方をしていること、部員が今現在共感する世界を描いていること、その瞬間瞬間生きた言葉を語らせるように仕向けていること、それよりなにより、部員たちが面白がって生き生きと演じていること、それが書かれた本以上の作品になったと思います。」と台詞の巧みさとテーマの普遍性を評価している。また、自身も演劇部の顧問で、翌年演劇部を全国大会に導いた、富山第一高校演劇部顧問の近藤三知子は「登場しない野球部員の名前が脚本に書いてあるように、この四人が見せてくれるのは、自分たちも含めた現代の高校生の実態。それが自然で生き生きしたそして楽しい関西弁で見事に表現されていました。」と生きた台詞と登場しない野球部員による世界の広がりについて触れている。そして、第一章で触れた佐川も「試合経過、飛球、選手など舞台外の世界を観客が想像できたのは、細部までイメージを共有した練習量の賜物でしょう。」とこの作品特有の、舞台世界の広がり評価している。

一方で、改善点として指摘された部分としては後半の展開が挙げられる。佐川は、「あえての改善点は、展開が王道すぎて、先が予想できてしまう点。」と単調な展開を指摘している。また、日本大学芸術学部教授の藤崎周平は設定の妙を褒めた上で、「試合経過、つまり、球場内の呼吸や溜息をシーンに反映させていく工夫があれ

ば、端が一転して全体に転化する幕切れは、球場が劇場とも重なり、より劇的になったと思う。」と語っている。

以上のように王道的な作品故の指摘点もあるが、審査員七人による審査集結では本作が二〇一七年度全国大会唯一の満票であり、好評的な意見の多さからも、飛び抜けた評価をされたことがわかる。やはり、アルプススタンドの向こう側まで描く、作品世界の広がりには本作が持つ演劇作品としての強度と言える。

### 第三章 映画版「アルプススタンドのはしの方」について

#### ・映画版の概要

二〇二〇年劇場公開。SPOTTED PRODUCTIONS制作、城定秀夫監督にて映画化され、小野莉奈や平井亜門といった新進気鋭の若手俳優が登場人物を演じた。映画化前年に本作は商業演劇としても上演され、安田役の小野をはじめ、田宮役の西本まりん、宮下役の中村守里、厚木先生役の目次立樹は舞台版からの続役のほか、舞台版にて演出を担当した奥村徹也は映画版にて脚本を執筆している。映画版のキャッチコピーは、「そこは、輝けない私たちのちよつとだけ輝かしい特等席」である。

本作は第四二回ヨコハマ映画祭にて監督賞、第一二回TAMACINEMA FORUMにて特別賞を受賞するなど映画としても高く評価され、公開から三年が経過した現在も各地の映画祭にて上映されている。

## ・原作版と映画版の相違点

映画版では四人のほかに久住、そしてオリジナルキャラクターとして熱血漢な教師厚木が登場する。一方で、グラウンドと野球部員を映さない演出は、映画でも一貫して行われている。大きな相違点としては次のものがあげられる。

- ① 時間の違い 高校演劇版は約六十分、映画版は約七十五分である。
- ② 登場人物の違い 映画版にはオリジナルキャラクターほかエキストラが多数出演する。
- ③ 場所の違い 高校演劇版は甲子園球場が舞台だが、映画版は神奈川県平塚球場で撮影されている。
- ④ 言葉の違い 高校演劇版は関西弁であるが、映画版は標準語になっている。またそれに伴い、映画版は安田たちの学校が兵庫県から関東の学校へと置き換えられている。
- ⑤ 宮下の演出 高校演劇版の宮下は、気が強く一匹狼のようなキャラクターに演出されている。一方で映画版は静かでおとなしいが、芯のあるキャラクターになっている。
- ⑥ 幕開きとラストシーンの変更

以上が映画版における原作との主な変更点である。

④の言葉の違いに関して、原作版では、笑いを誘うようなシーンや演出も多く、関西弁の親しみやすさやリズム感の良さがうまく脚本とマッチしていた。また兵庫県の高校生が甲子園を舞台に演劇を

行うという地域性が、設定の必然性を高めていたため、ネイティブな関西弁は必要不可欠なものであった。だが、映画版は原作版と比較して原作版の笑いがカットされている場面も多く、作品の核自体がエモーショナルな方向に寄っていたような印象を受けた。また、作中の球場が甲子園ではなく、関西弁にする必然性がなかったことから、標準語での演出を選んだのではないかと推測される。ちなみに映画版「アルプススタンドのはしの方」のパンフレットにて、映画化の際甲子園球場での撮影を交渉したものの、許可がおりず実現できなかったという裏話が語られている。

## ・映画オリジナルキャラクターについて

厚木先生は安田たちを含めたアルプススタンドで応援する生徒らに発破をかける熱血漢な教師として登場する。誰よりも熱心に野球部を応援する彼は、生徒たちから暑苦しがられたり適当にあしらわれたりしているが、孤立している宮下を気遣ったり、受け持っていないクラスの藤野の名前を覚えていたり、生徒たちを気にかけていることが伺える。物語中盤、宮下との会話の中で本当は野球部の顧問をしたかったがそれが叶わなかったであろうことが明かされる。厚木先生も安田たち四人と一緒に「しょうがないことの壁」にぶつかった人物であるのだ。だが、安田たちのようにくすぶって諦めているのではなく、しょうがないことを受け入れた上で誰よりも声を張って応援する姿は、場を明るくするとともに大人ゆえの一種の諦めと寂しさを感じさせるものであった。高校生の安田たちとは違い、大人として差別化して描かれていた。よって、高校生よりも年齢層が上の観客が共感しやすい人物になっている。

続いては、久住について述べていく。原作版では久住はセリフのみで登場し、アルプススタンドのはしの方にいる彼らとは違って、明るく、努力家で青春を謳歌している人物として描かれていた。原作版の台詞で、安田「めっちゃ喜んでた。(テストで)初めて宮下さんに勝ったって言うて。」(「アルプススタンドのはしの方」二〇一頁)とはあるものの、久住が宮下に関して触れているとわかるのはこのシーンと物語終盤宮下の声で振り返るときのみで、基本的には宮下が久住に強い劣等感を抱いていた。

一方で、映画版では久住も宮下に劣等感を抱いていることが明かされる。体調を崩した宮下と介抱している田宮を久住が追いかけて、宮下に飲み物を差し入れるが無視されるシーンで以下のように語っている。

久住 無視しないでよ。そしたら、頑張ってる私がかみみたいじゃん。

宮下 別に私一人が無視しても、久住さんは私が欲しいもの全部持つてる。だから……。

久住 なにそれ、何も知らない癖に。私は普通だよ。でも、だから努力してる。無理して頑張ってる。そしたら全部ちゃんと報われたらと思うの。そんなに変かな。真ん中は真ん中でしんどいんだよ。

(映画版アルプススタンドのはしの方 四五分〜四七分)

このやりとりから久住と宮下が互いに劣等感を抱いており、久住が宮下の態度に怒りや悲しみを感じていることが読み取れる。

また、宮下に対する劣等感のほかにも、恋人である園田とあまりうまくいっていない描写や試合の応援のモチベーションが低い吹奏楽部に「ちゃんと応援して」と怒りをあらわにするシーンがある。安田たちから見て恵まれていると思われた彼女もまた、努力を重ねても必ずしもうまくいくわけではない、自分ではどうしようもない現実に悩んでいるひとりであることが示唆されている。久住の劣等感、久住と宮下と対立を描いたことから、終盤の宮下が久住にエールを送るシーンでは、より感動と青春の爽快感が増したエモーショナルなシーンとなっている。

#### ・宮下の演出について

登場人物四人の中で演出に大きな変化があったのは宮下である。

高校演劇版では真面目で気が強く、あまり関わりのない安田や藤野にも自分の思っていることを正直に言う姿が時には観客の笑いを誘い、後半の安田との「どうしようもないこと」に対する言い合いのシーンにも自然な印象を持たせていた。

一方で映画版は静かでおとなしい印象を受け、高校演劇版の気の強さはなかった。だが、久住や他の登場人物に対する融通の利かさなど不器用さは高校演劇版と共通しており、表面的な見え方は違うものの、心の奥に抱えている思いは一緒であると感ぜられる演出になっていた。

また、映画版の特徴として宮下が田宮に心を開いていく描写があった。原作版では田宮の勢いに宮下が巻き込まれていく形であったが、映画版では丁寧なその過程が描かれ、学年で浮いている宮下にも臆せず対等に関わる田宮の優しさや打ち解けていく宮下の愛お



しさなど、新たな登場人物の良さが提示された。

### ・映画版の幕開きとラストシーンについて

高校演劇版は野球の五回裏から試合終了までの物語である。

一方で映画版では、映像ならではのシーンの追加がなされており、幕開きとラストともに違う展開となっている。幕開きは、安田が演劇部の顧問と思われる人物に「しょうがないよ」と声を掛けられ、悔しそうな表情を浮かべているシーンになっている。これはテーマである「しょうがないことにどう向き合うか」の提示とともに、安田と田宮の溝の伏線として機能している。そしてラストシーンは、大人になった四人が矢野のプロ初試合を観戦し、藤野が矢野のホームランボールを取り幕が閉じる。そして、大人になった安田は母校の演劇部で顧問を務めており、藤野は野球用具を制作している会社に勤めていることが明かされる。四人だけでなく厚木先生や園田の現在も台詞で説明され、それぞれが夢や高校生の頃に諦めかけたことに対して新たに挑戦している姿が描かれた、希望のある未来を提示されたラストであった。

### ・映画版の評価

映画版「アルプススタンドのはしの方」の公式パンフレットには、関わったプロデューサーたちのコラムのほか、本作の映画評も掲載されている。

映画評論家のミルクマン斎藤氏は城定作品の歴代の要素（物や移動の少なさ）に触れた上で、「（前略）諦めの感情が合流した時、諦めずにバッドを振るグラウンドの野球部員たちの姿がそんな静観を

一気にぶち破るのだ。」と、本作のカタルシスを評価している。そして脚本家の守屋文雄氏は映画版で追加された宮下と田宮のシーンについて「宮下さんの顔に初めて笑顔が浮かぶ。（中略）『しょうがない』という言葉にがんじがらめになっていた映画そのものがここで勢いづく。」と語り、映画版における宮下と田宮の個性について触れている。また宮下に関しては、ミルクマン斎藤氏も城定映画の眼鏡を書けた登場人物に触れ、「メガネっ娘は城定映画に頻出するが、それはたいがい自らのリビドーを抑圧する引っ込み思案な女性の記号であって宮下さんも例外ではない」と語った。前で触れた原作版と映画版における宮下の演出の大きな違いは、宮下が自らの感情を解放する過程のカタルシスをさらに増すための装置として機能していたのだ。

高校演劇作品の商業化においては、高校演劇ならではの要素として挙げた、高校という場の密なコミュニケーションや顧問と生徒の相互関係による当てがきの要素はどうしても無くなってしまふ。だが、登場人物の追加や幕開きシーンの変更、ギャグシーンのカットによって、映画版は原作版に比べて、「どうしようもないことにどう向き合うか」というテーマがより際立っており、六十分の高校演劇では出来ない映画ならではの表現が駆使されていた。そして宮下と田宮の、原作版では比較的サポートに回る立ち回りだった彼女たちにもしっかりと焦点が当てられていた。高校演劇原作の商業化作品の第一歩として、原作の良さも残しつつ、原作ファンも映画ファンも楽しめるまた違った『アルプススタンドのはしの方』になっており、それが映画としての高評価にも繋がったと言える。

## 第四章 高校演劇を超え評価された理由の分析

### ・高校野球と高校演劇 スポーツものと高校演劇の親和性の高さ

「高校演劇」というと、高校演劇に触れたことがない人はどんなイメージを抱くだろうか。

一方で、夏の季語にも数えられる「高校野球」。この高校野球というモチーフは、高校演劇を知らない人でも触れやすいものである。

近年の高校演劇全国大会の最優秀賞受賞作の傾向として、スポーツをモチーフにしたものがいくつかある。具体例として、二〇一六年岐阜農林高校演劇部上演「I's」、二〇一九年丸亀高校上演「フットボールの時間」が挙げられる。また余談ではあるが、「フットボールの時間」は坂本春菜氏により映画化企画が進められている。高校生のコミュニティの中では運動部と文化部と大きくふたつに区分され、全く正反対のもののように論じられるが、活動内容は違えど限られた時間の中で何かを目指し、何かに打ち込む姿は、高校演劇を問わず全ての文化部活動とスポーツは案外親和性があるもののように感じるし、演劇のテーマとしても共感度も高い。

また舞台という空間的な制約のある場所で、どう競技を表現するかというのも、舞台ならではの面白さがある。例えば「アルプススタンドのはしの方」が目線で野球を表現したように、岐阜農林高校演劇部上演「I's」ではボールなしの体の動きだけでバスケットボールの試合を、丸亀高校演劇部上演「フットボールの時間」は実際に小道具でボールを使用して表現している。高校演劇という枠組

みの中においても、作品によって多種多様な競技の表現をされていることから、改めて高校演劇における舞台表現の可能性の広さを、スポーツものは感じさせてくれる。また高校演劇だけでなく商業演劇にも目を向けると、「テニスの王子様」や「ハイキュー!」などの漫画作品を舞台化した二・五次元舞台でもボールを使わない表現がされている。「テニスの王子様」では、ミュージカル形式で音楽やプロジェクションマッピングが使用され、エンタメ性に富んだ作品になっている。だが、「テニスの王子様」も前述の高校演劇作品も全て競技をする選手側をメインに描いた作品であり、観客側を主軸に描いたものではなく、その点で「アルプススタンドのはしの方」はオリジナリティを感じさせられる。

そして第二章で触れたように、「アルプススタンドのはしの方」では登場人物四人のいる舞台美術として表現されている一部分の空間だけではなく彼らを取り巻くマウンドやアルプススタンドまでをきっちりと描いている。具象舞台かつ一幕ものの会話劇の作品で、ここまで観客の想像力を掻き立て、見えないものにまで説得力を抱かせることは容易ではない。この作品世界の広がりそこから生まれている説得力が、本作品ならではの魅力であると共に、高校演劇という枠組みを飛び越え、評価された理由のひとつである。

### ・登場人物の悩みの普遍性

「アルプススタンドのはしの方」テーマである「どうしようもないにどう向き合うか」という議題、そしてアルプススタンドの彼らが抱えていた「どうにもならないことへの焦り」はコロナ禍だからこそ、身を持って体感した人も多いはずだ。その中でも特に安田の

抱えていた葛藤は、演劇に携わる人であればコロナ禍で一度は経験したことがあるのではないだろうか。本戯曲が執筆されたのは二〇一六年のことではあるが、感染症や災害などによる免れることのできない中止やそれに伴う無力感は、誰もがコロナ禍で経験し、考えさせられたことであり、安田の葛藤は執筆当時よりも現在の方がさらに増して共感性が高いと考える。野球部の試合を通して、「田宮のインフルエンザ感染で大会に出られなかった、仕方がなかった。だから諦めた」が「でもやっぱり田宮と演劇がしたい。だから今年も大会に出る」と前向きに変化する安田の心情は、コロナ禍を経験した今を生きる私たちにより響く。

また本作が映画化し、スクリーンデビュー果たしたのは奇しくもコロナが猛威を振るっていた二〇二〇年であった。前述の通り映画版では、原作には登場しなかったオリジナルキャラクターの熱血漢な教師と、吹奏楽部の久住が登場し、「アルプススタンドのはしの方」の彼らの焦燥感と共に、日向にいる者たちの葛藤にもスポットが当てられていた。前述の原作との相違点も含め、原作版よりもわかりやすく彼らが抱えている「どうしようもない」ことへの焦燥感を実際立たせる演出がコロナの時代にマッチし、高校演劇という枠組みを取り払い、映画としても高い評価に繋がったのではないかと考える。

### ・初演版「アルプススタンドのはしの方」の持つ高校演劇らしさ

第一章にて、佐川大輔と作者の藪博晶の言葉を借り、高校演劇らしさとは完成されていない肉体や粗のある未完成感であると書いてきた。演技に対する指摘である前述の高校演劇らしさは、「アルプス

スタンドのはしの方」にも当てはまっている。正確性を求められる目線での野球ボールの表現の一方で、完成されていない活舌や大袈裟に見える演技の部分は、素朴で冴えない安田や藤野たちの等身大の姿や葛藤とうまくマッチしており、観客の心を打つものであった。そして、本作品の持つ「高校演劇らしさ」について、新たに作品世界の必然性を挙げたい。本作品のテーマは誰もが共感できる普遍的なものである。

一方で、甲子園や関西弁といった要素は地域性が色濃く出た要素で、範囲が限定的なものである。映画版「アルプススタンドのはしの方」が関西弁から標準語に置き換えたことから、関西弁や甲子園などといった要素は限定的なものであることが読み取れるだろう。例えば、関東の高校生が甲子園を舞台に関西弁で創作したとして、観客や審査員は「どうして関東なのに甲子園を選んだのだろう、なぜ関西弁でしゃべっているのだろう」と疑問を抱くだろう。なぜなら、そこには必然性がないからだ。だが、兵庫県の高校生が、自身になじみのある方言を台詞に使うことや、身近であり、かつある種高校生の青春の象徴のような甲子園という場所を舞台に選ぶことはあくまで自然なものである。言い換えると、「アルプススタンドのはしの方」は甲子園が身近な兵庫県で、その場所で生活している作者の藪と高校生が作り上げ演じたからこそ完成した演劇であり、その過程における必然性が役者や脚本の説得力を強め、高校演劇という枠組みを超えて、評価されるに至った作品の爆発力に繋がっている。また前述した原作版での講評で審査員が評価した生き生きした言葉も、関西の高校生が関西弁で演じたことならではの効果である。

高校演劇は教育現場での活動である以上、生徒には卒業、顧問には異動や定年といった抗うことのできない期限がある。高校という特殊な場所の人と人の繋がりが強さの一方で、毎年メンバーが入れ替わっていく。そんな中で、その年にその学校にいた高校生だからこそ上演できたという必然性と一回性こそが「高校演劇らしさ」なのではないだろうか。また、その必然性が生まれるのは自ずと既成台本ではなく創作台本であり、コンクールを勝ち進んできた全国大会という場において創作脚本率が高いのも、その作品の必然性が関係していると推測される。このことは、第一章で引用した、加藤の「演劇教育による協働的創造性育成過程の質的研究・演劇部活動における高校生の変化」でも触れられている。加藤の「生徒と生徒との共同のみならず、生徒と教師との共同も重要な要因」で「演劇活動の参加者は、観客も含め、舞台の上で創造されたものを通じて実際の生活を学び直す、という経験」をしているのだが、「参加者が協同的に活動し、集団の矛盾や対立を止揚しながら創造した創作脚本によって活動した場合に、より顕著に看取出来る経験である」(加藤裕明「演劇教育による協働的創造性育成過程の質的研究・演劇部活動における高校生の変化」、北海道大学博士(教育学) 甲第一二二八四号、二〇一六年三月、([https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/62207/1/Hiroaki\\_Katopdf](https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/62207/1/Hiroaki_Katopdf) 閲覧日二〇二四年一月九日)という指摘も、前述の「高校生らしさ」の必然性と創作脚本の優位性を裏付けている。

## まとめ

以上のことから、「アルプススタンドのはしの方」は①共感性の高い等身大の登場人物、②高校野球というモチーフ、③緻密に作られた作品世界、の三点が卓越して優れていたことにより、高校演劇という枠組みを超え、評価されたのだと推測する。また二〇二〇年のコロナ禍では、感染症で大会出場を断念し演劇を諦めた安田の葛藤のメッセージ性が強まった。このように題材が普遍的であるがゆえに、上演される時代によって、テーマの受け取り方やメッセージ性の強さが流動的に変化していることがわかる。

高校演劇は社会を映す鏡だ。本作品は、目線の演出、音響操作など難しさが求められる舞台ではあるが、現在に至るまで多くの高校で上演されている。コロナ禍という大きな事態の変化を通じてもお、多くの高校生から共感を集め、支持され、上演されている。何よりこのことこそが、「アルプススタンドのはしの方」という作品の素晴らしさと作品としての強度を裏付けている証明だ。

「アルプススタンドのはしの方」の商業舞台化、映画化、ノベライズ化……といった一連は高校演劇界において前代未聞の出来事であった。高校演劇の知名度が更に上がり、例を挙げるなら高校野球のように多くの方の日常になってほしい。そんなふうを考えてしまう、素晴らしい出来事だった。「アルプススタンドのはしの方」を含め、昨今の高校演劇の商業舞台化、映画化において高校演劇の創作脚本は、ある意味で一般の商業演劇などともあまり遜色ないと証明されたと言えるだろう。このことは第一八回AAF戯曲賞にて特別賞を受賞した南山高校女子部演劇部・渡辺鈴作「by us」

や第二四回劇作家協会新人戯曲賞一次選考通過したよしだあきひろ作「意外とゆっくり飛んでいる」のように一般の戯曲賞に高校演劇の創作脚本が入賞することからも読み取ることが出来る。高校演劇への注目が高まっている一方で、高校演劇だからその必然性をどう超えていくかが今後の高校演劇の脚本を高校生以外が上演する際の課題となっていくのではないだろうか。

「高校演劇は時代を映す鏡」と称したように、高校演劇は時代の流れとともに変化していき、その時代ごとに新たな題材や表現が見つけられていく。奇しくも昨今のコロナ禍で高校演劇も映像配信されるようになり誰もが気軽に触れやすくなったことで、高校演劇も高校野球のように「青春の象徴」となりうる可能性を十分に秘めている。一方で、一連の展開や商業演劇版、映画版を否定する意図はないが、高校演劇は高校生のための演劇であってほしいと、私は常々思っている。高校生の表現の場としてだけではなく、高校生が一つの物事に向き合う成長の場として、高校演劇は存在する意義がある。今後は、高校演劇だけではなく高校生の演劇教育にも目を向け、演劇が高校生にもたらす影響、効果について理解し、検討していきたい。

そして最後に、戯曲は上演されてやっと完成するものだと私は考えている。「アルプススタンドのはしの方」という作品の灯火が消えることなく、これからも高校演劇の名作として受け継がれていくのを願う。

## 参考文献

### 単行本

- ・ 飴屋法水『ブルーシート』白水社、二〇一四年四月
- ・ いしいみちこ『高校生が生きやすくなるための演劇教育』立東舎、二〇一七年五月
- ・ 藪博晶「アルプススタンドのはしの方」『季刊高校演劇』NO.241、2017、宮城大会上演作品特集、高校演劇劇作研究会、二〇一七年七月
- ・ 相田冬二『舞台上の青春 高校演劇の世界』辰巳出版、二〇二〇年一月
- ・ 周東美材『未熟さの系譜』新潮社、二〇二二年五月
- ・ 平田オリザ『学びのきほん ともに生きるための演劇』NHK出版、二〇二二年七月
- ・ 工藤千夏『コロナ禍三年高校演劇』論創社、二〇二三年八月

### 論文・雑誌記事

- ・ 尾上明代「学校とドラマセラピー演劇の癒す力への応用」『演劇学論集』四〇、日本演劇学会、二〇〇二年一月 ([https://www.jstage.jst.go.jp/article/jst/40/0/40\\_31/pdf/char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jst/40/0/40_31/pdf/char/ja)) 閲覧日二〇二三年十一月二〇日
- ・ 加藤裕明「演劇教育による協働的創造性の獲得―部活動による高校生の演劇創造過程に着目して―」『教育学の研究と実践』九号、北海道教育学会、二〇一四年四月 ([https://www.jstage.jst.go.jp/article/tpe/9/0/9\\_1/pdf/char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/tpe/9/0/9_1/pdf/char/ja)) 閲覧日二〇二四年一月九日
- ・ 加藤裕明「演劇教育による協働的創造性育成過程の質的研究―演劇部活動における高校生の变化―」北海道大学博士（教育学）甲第一二二八四号、二〇一六年三月 ([https://prints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/62207/1/Hiroaki\\_Katopdf](https://prints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/62207/1/Hiroaki_Katopdf)) 閲覧日二〇二四年一月九日

### パンフレット・フライヤー

- ・ 『宮城総文 二〇一七 演劇部門プログラム』二〇一七年八月高校演劇

全国大会の当日配布プログラム

- ・『演劇創造』一三七、全国高等学校演劇協議会、二〇一七年一月
- ・「アルプススタンドのはしの方」二〇一九年六月浅草九劇上演時パンフレット、SPOTTED PRODUCTIONS 発行、二〇一九年六月
- ・映画「アルプススタンドのはしの方」パンフレット、SPOTTED PRODUCTIONS 発行、二〇二〇年七月
- ・『とうきょう総文 二〇二二 演劇部門プログラム』二〇二二年八月高校演劇全国大会の当日配布プログラム
- ・ala Collection シリーズ「フットボールの時間」二〇二三年一月吉祥寺シアター公演時フライヤー

ウェブサイト

- ・日本演劇学会分科会演劇と教育研究会研究資料 尾上明代「学校教育におけるドラマセラピーの効用」(<https://ekmoo.jp/archives/event/20000731one>) 閲覧日二〇二三年一月二〇日
- ・特別講演会(二〇〇六年七月二九日開催) 記録 講演者ルネ・エムナー、沢中野左知子、主本文立命館大学人間科学研究所「ドラマからドラマセラピーへの新たな展開―自己表現とアイデンティティの広がり―」(<https://www.ritsumei-human.com/hsrc/resource/15/005-022.pdf>) 閲覧日二〇二四年一月九日
- ・全国高等学校演劇協議会規約 ([http://koenkyo.main.jp/?page\\_id=44](http://koenkyo.main.jp/?page_id=44)) 閲覧日二〇二三年一月二〇日
- ・徳島県高等学校演劇協議会、脚本ダウンロード、よしだあきひろ「s016」([https://819debc3-04f0-435d-a319-788ff77b1efb.filesusr.com/ugd/a537f4\\_036fb40d71404c2bc53fd0cddf7e592.pdf](https://819debc3-04f0-435d-a319-788ff77b1efb.filesusr.com/ugd/a537f4_036fb40d71404c2bc53fd0cddf7e592.pdf)) 閲覧日二〇二三年一月二〇日
- ・みらいぶ高校生応援「全国高等学校演劇大会に初出場 岐阜県立加納高校演劇部メンバーの「夏の思い出」から生まれた、つながりの尊さを描

く群像劇『彼の子、朝を知る。』」(<https://www.milive.jp/live/170702/>) 閲覧日二〇二三年一月二〇日

- ・「シアターモーメンツ」佐川大輔公式ブログ (<http://moments.jp/2017/08/10/dail/>) 閲覧日二〇二三年一〇月一〇日
- ・愛知県立芸術劇場「第一八回AAF戯曲賞 公開審査会」(<https://www.stage.aac.pref.aichi.jp/event/detail/000113.html>) 閲覧日二〇二四年一月九日
- ・日本劇作家協会「第二四回劇作家協会 新人戯曲賞」(<https://www.jpwa.org/main/activity/drama-award/437>) 閲覧日二〇二四年一月九日
- ・映画「アルプススタンドのはしの方」公式サイト (<https://apsnohashi.com/>) 閲覧日二〇二三年一月二〇日
- ・朝日新聞デジタル「当て書きで良を引き出す 滝川高校定時制演劇部2人が師弟役熱演」(<https://www.asahi.com/articles/ASQ3S5Z2MQ3SHPPE0OR.html>) 閲覧日二〇二三年一月二十日
- ・中村勉 note「放課後の旅・高校演劇の脚本について」(<https://note.com/suchanga/n/rsbc732864309>) 閲覧日二〇二三年一月二〇日
- ・ジャパンナレッジ「ドラマセラピー」([https://japanknowledge.com/psnl/display/?hid=5002019\\_160146200](https://japanknowledge.com/psnl/display/?hid=5002019_160146200)) 閲覧日二〇二四年一月九日
- ・ジャパンナレッジ「サノトラップ」(<https://japanknowledge.com/psnl/display/?hid=1001000094002>) 閲覧日二〇二四年一月九日

映像

- ・「青春舞台2017」NHK制作、二〇一七年九月九日放送
- ・映画「アルプススタンドのはしの方」原作・藪博晶、監督・城定秀夫、SPOTTED PRODUCTIONS 制作、二〇二〇年七月公開
- ・ブルーレイ「アルプススタンドのはしの方」原作・藪博晶、監督・城定秀夫、SPOTTED PRODUCTIONS 制作、二〇二二年一月発売